

内田魯庵全集

4

回 想 Ⅱ

ゆまに書房

内田魯庵全集 第四卷

五〇〇〇円

昭和六十年十一月二十八日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 (株)常 川 製 本

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町

電話(二九二)〇七九八

振替 東京四―六三一六〇

内田魯庵全集第四卷／回想Ⅱ 目次

早矢仕有的氏	七
神巧的悲劇（伊藤博文）	一九
蘆花君（徳富蘆花）	二三
田山花袋論	二六
山路愛山氏	二九
西園寺侯について	三三
聰明な人（島村抱月）	三七
『杏の落ちる音』の主人公（岡田紫男）	四〇
明治の文學の開拓者（坪内逍遙）	五七
二十五年間の文人の社會的地位の進歩	六四
氣まぐれ日記	八〇
無言の一大獅子吼（乃木希典）	一六七
齋藤綠雨	一七〇

德田秋江論……………	一八六
美妙齋美妙……………	一八七
硯友社の勃興と道程……………	二〇五
淡島椿岳……………	二五三
溫情の裕かな夏目さん（夏目漱石）……………	二九五
江戸趣味の第一人者（永井荷風）……………	三〇〇
喫煙語（大隈重信）……………	三〇五
鷗外博士の追憶（森鷗外）……………	三〇八
勞農政府の承認問題（片山潜）……………	三二二
最後の大杉（大杉榮）……………	三三四
卅年前の島田沼南……………	三五三
卅年前の思出……………	三七四
四十年前——新文學の曙光……………	三七五
原抱一庵……………	三八八
抱一後談……………	四〇三

『れげんだ・おうれあ』（芥川龍之介）	四三二
露伴の出世咄（幸田露伴）	四三八
八犬傳解題的梗概	四四一
八犬傳後記	四四四
八犬傳餘談	四四七
解 題	四八一
解 説	五一五

回

想

Ⅱ

早矢仕有的氏

丸善の創立者たる

私が丁稚となつてから三日目か四日目だ。店を閉つて一休みと息をついだ處で、支配人さんから早矢仕先生の許へ使ひに行けといふ命令だ。早矢仕先生とはドンナ人だか、どういふ關係のある人だか、一向知らぬが、支配人さんの命令だから手紙を持つて出掛けた。

上野の近所で、何だか知れにくい處だつた。餘り奇麗な家では無かつた。格子を開けて取次の方に手紙を渡すと、奥から聲がして、返事をやるから上つて待つてると云ふ。

唯々、お辭儀ばかりしてゐたが、上れ／＼と頻りに云はれたから、あんまりお辭儀をしても悪いと思つて恐る／＼^{にち}蹂り上つた。

玄關の三畳だつたか、二畳だつたかの次が八畳ばかりのお座敷だ。

只見ると、床の間は本だの、新聞だの、紙屑だの、瓶だの、鑽石だの、ガラクタで一杯だ。机の上

も同様だ。先生は其前にお粗末な箱火鉢を控へて、洋服のまゝのアグラで、チビリ／＼と御酒を召上つてゐらつしやる。其周圍は大小の埵塙や大小の藥罫や、試験器や、今まで見た事もない奇妙な形をしたものが座敷中一杯に散らかつてゐた。晝は藥のシミや穴だらけだつた。

先生は五十位で、一見して極柔和な方だつた。物言振も柔和だつた。女のやうな口の利き方だつた。『お前はイツ奉公に來た、イクツになる、親父は何をしてる……』などお訊きになつた。

其間、先生は藥を調合して見たり、火に掛けて煮たりしては、御酒をチビリ／＼召上りながら何だか興に入つてをられた。

聽てお返事を頂戴して歸つたが、私には勿論ドンナ人物だか一向解らず、唯妙な人だとばかり思つてゐた。

翌る日、朋輩に訊くと、あの早矢仕先生といふのが丸善の以前の旦那ださうな。が、爾う聞いたゞけで、此以上氣にも留めなかつた。

二三日すると、朝早く早矢仕先生は車でおいでになつた。私は店が忙がしいから、先生は何にしに來られたか、格別注意もしなかつたが、何時まで經つても先生の車は店さきにある。臺處では車夫が長々と寝てゐる。十二時を打つても、三時になつても、到頭店を閉つても先生はお歸りにならぬ。私は最う忘れて了つたが、日が暮れてから、偶つと用があつて奥へ行くと、先生は支配人さんと碁を打つてをられた。段々聞くと朝から碁を打つてをられたのださうだ。

或る時、支配人さんの急用で朝早く先生のお宅へ使ひに行つた。處が最うお出ましになつたさうで、多分どこそこををられるだらうと聞いて、直ぐ其家へ行くと、今誰さんの家へ行かれたといふ。夫から又其の誰さんの家を尋ねると、唯つた今お歸りになつた處だといふ。先から先からと先生の跡を小半日追廻して到頭解らず了ひに店へ歸ると、先生は此時既う店に来てをられた。

或時また、先生のお宅へ使ひに行くと、取次の方が裏へ廻れといふ。夫から裏へ廻ると、物置か炭部屋然たる小屋の中から先生がお顔を出されて、『此方へ入れ』と仰しやる。變だナ、と思ひながら、恐る／＼物置小屋へ入ると、中央に大きな「カマ」が築いてあつて土管の煙突が出来てる。周圍には藥壇の棚が出来てゐて壇が澤山陳んでる。先生は忙がしさうに、何だか分析じみた事をしてをられたが、ズゞ玉位な大きさの金の塊を手の掌に載せられて、『六、之を見る。あの石（と直ぐ傍の鑽石を指して）から之だけの金が取れる、』と頗る御機嫌だつた。私には何にも解らぬから、ヘイ／＼ばかり云つてゐたが、先生は頻りと難かしい講釋をなすつた。私には無論少しも解らなかつた。

何でもアトで人から聞くと、先生は遠州あたりの山から出る金鑛の試堀中だとか、鑽石の試験中だとかださうで、先生はコンナ鑽石の分析をなさるにも何でも自己流で骨を折られたのださうだ。先生は何でも自己流が好きで、『本なんぞが役に立つものか』といふ調子だから、鑛物分析をするにも冶金學などは一向振向いても見ないで自己流の勝手な分析をされる。随つて餘計な骨が折れるし、一匁の金を取る爲に要する時間も費用も莫大だが、先生はそんな事は關はぬ。何でも自分で工風してはド

ウカ斯うかやり終せる。

間もなく先生は亡くなられた。我々小僧連は列を作つてお伴に立つたが、朝野の紳士が大勢會葬された。當分は先生の噂で持切つてゐた。何でもエライ人だといふ事だが、どのくらゐエライのか私達には無論解らなかつた。店の支配人さん達は先生々と今でも尊んでゐるが、店ではエライ人であつたにしろ、世間へ出したらどの位エライのか解らなかつた。

すると横濱の開港五十年祭となつた。濱の貿易新聞で横濱の功勞者六大偉人を投票で募集した。早矢仕先生の名が見える。シカモ中々な高點が入る。私は昔しの記憶を思出して、是非六大偉人の中に入りたいといふ氣がムラ／＼して來た。が、先生はソナ事は大嫌ひであつたといふので、支配人さんも知らん顔だし、誰一人心配するものは無い。店員の一人だつて唯の一票を入れたものは無い。先生の御子息さんも笑つてをられた。先生の名が六大偉人に數へられようが數へられまいが先生の名譽なり功積なりを損益するに足らぬといふ權式だつた。

處が、愈々締切となつた。我々店員は勿論、先生を知る誰も運動をしたと云ふ咄を一向聞かぬが、先生は到頭六大偉人の一人と選ばれた。

處で、貿易新聞に載つた先生の傳記を私は讀んで、先生が文明に寄與した大功勞あるを、初めて知つた。尤も先生の閱歷が偉人として稱せられべきものであるか否やも知らないし、且自家の雜誌面に店員の口から自家の創立者たるものを苟りにも偉人など稱するは口幅つたくもあり又甚だ面伏である

が、シカシ之は貿易新聞で投票を募つた結果で、我が社の毫も與らざる處である。唯之を茲に轉載する所以、早矢仕有的の一生の事歴は丸善一個の誇りでなくて、日本文明史上の若干の参考とするに足るものありと信じ、早矢仕を偉人などとは決して僭稱しないが、横濱五十年祭の折から現代文明發展の懷古の資料にもと思ふて、貿易新聞所載の傳記を其儘に轉載する。無能者の先祖自慢などゆめ思ひ玉はらざらん事を庶幾す。

早矢仕有的の横濱に與へたる文明の曙光

嘉永の年米國の艦隊が横濱を襲うてから横濱の歴史は全く日本新文明の歴史である、即ち、貿易は勿論の事、學術、工業製造、宗教、會社銀行の進歩、殊に醫術病院の如き、文明的の事業幾んど一として横濱より發せざるはなしと斷言して差支がない、尤も文明の輸入地點であつたと共に、諸般の弊風も傳へたに違ひないが、要するに横濱は日本新文明の發祥地であつた。

病院の鼻祖

嘉永安政以來、我國には早くも、西洋流の醫家が追々と現はれ、文久三年に死去した緒方洪庵の如きは、安政五年コレラ病に、西洋流の治術を施し且つ豫備方法等一々西洋の衛生法を施したさうである。去れば慶應から明治の初めに當つて西洋流の新大家は續々と輩出し、國民の健康、幸福を扶掖補佐したのであるが、明治三四年までは、東京にも病院として完全なものは、一つもなかつた、否な不完全にもせよ病

院組織の治療所は、皆目無いと信ずる、然るに、横濱には明治四年八月、新築の病院が今の北仲通六丁目に現はれた、是れ即ち共立病院で、日本全國病院の元祖であつた。

共立病院は、院長が大學東校の松山棟庵で、副院長のやうなものが早矢仕有的であつた、而して助醫として米國醫シンモンスが一週間に一回、病院に出勤したが、この米人も日本人の大思師である。共立病院の組織等種々の細説は、後日の事とし、偕てこの病院は何人の發起であるかと云ふに、早矢仕有的の西洋醫術的理想の結晶である、早矢仕が衆人よりも先見者で、また、實行躬踐者であつたことは、共立病院の一例を以て發見さるゝのである。

福澤先生と早矢仕

元來早矢仕は美濃國武儀郡笹賀村の醫者で、文久元年頃は既に江戸に出て、日本橋の藥研堀に醫門を張つた、しかし、渠れの目的は村學究の漢法醫を以て、大江戸の大家と治術を爭はんとするのではない、當時蘭學大醫の坪井や伊藤その他の西洋流の大家につき、大に醫術を研究せん爲めである、而して渠れは早くも福澤諭吉を欽慕し、先生の門下となつて英語を學習した、早矢仕が後來、經濟、商業の事に志し、自から其局に當るべく覺悟したのは、全く先生の感化であり、陶冶であるのみならず、先生も早矢仕の材幹精勵を信認し、顧問ともなり相談役ともなり、時には先生の爲さんとする所を、早矢仕に行はしめやうと仕た、師弟間に斯く心念が一致したら天下の事何事か成らざらんやと想ふ、卑近の例ではあるが人力車が初めて製造されて、車が福澤の邸に到着した、これは製造者が先生の教を仰ぎ、やつとの事、出來たので

あるから乗試しを先生に請はんためである、先生はこれを見て大に喜び『早矢仕さん、貴公一番乗試しをやつて下さい、かやうな新規な製作物は貴公の試験に限る』と遂に早矢仕に、人力車の初乗をなさしめたなど、又た早矢仕が横濱に於て初めて蝙蝠傘を輸入し、先づ先生に進呈して、日本人第一に傘の翳^さし試しを先生に請うたなど、師弟間の温情交歡眼に見るやうで、先生の早矢仕を信じてゐた事が、これで明瞭であると想ふ。

文明の新商賣

早矢仕は素と醫者である、その慶應義塾に入つたのは、英語を學ばんが爲めではなくて、醫書を讀む力を養はんが爲めに英語を修めんの考であつたのである、然るに早矢仕は先生から西洋の經濟學及び商店會社の事を話さるゝに従つて、商業の今の世に尊重すべき職業たることを悟つて、遂に刀圭を投じて商界に従事する決心を定めたのである。（上野の戦争の當日に福澤先生が從容としてウェーランドの經濟書を講じつゝあつたと云ふ話しは有名の話であるが、早矢仕も其日の聽講者の一人であつた）そこで早矢仕は其病家の得意を桑田衡平といふ人に譲つて横濱に出かけて來たのは明治元年中のことであつた、横濱に於て商賣を開くに際して桑田に資金を借らんとした、桑田の言ふには病家の得意を譲つて貰つた禮として金四十兩を呈さうとのことであつたが、早矢仕は二十兩丈を貰ふこととして、尙ほ入用であれば借用金にするとして、その二十兩の元手で相生町三丁目で書店を開業した、書店と言つても多くは醫書を扱つたのであるが、之に附屬して藥品、内外科の機械等の店を開いた、醫書を輸入して醫學の新知識を導いても、肝心

の藥品機械がなくてはいかぬと云ふのが、早矢仕の藥品店を開始した理想であつた、折柄明治一、二年の間で、横濱の繁昌と共に店も相當に賑合ふ有様、尤も渠れは醫家たる本業を忘れぬので、店の二階は早矢仕先生の診察所で、輸入の新藥を患者に服せしむるの結果、草根木皮の長羽織先生と違つて、病氣が速かに快癒する、早矢仕の名は漸やく横濱に顯はれた、渠れは米國の醫師へボン先生やシンモンズ先生と交際し、歐米に病院の設けありて廣く患者を治療することを聞き、福澤先生とも相談して前述の共立病院を發起したのであるが、若し當時早矢仕が横濱に居なかつたならば明治四年に日本全國に魁たる病院を見ることは難かつたかも知れぬ。

奇禍と日米同盟

早矢仕は、共立病院時代に、不慮の災難に遭うた、或時アルコールを取扱ひつゝあつた際、誤つて火を發し、身は非常の負傷、病院も火災に罹つた、しかし、幸に米醫シンモンズから救助せられ、時を移さず治療したので全快はしたが、若し其救助、治療が遅れたならば渠れは傷死せざるまでも、眼を失ふとか、手を斬るとかして、必らず不具者となつたであらうに、逸早く米國人に救助されたのは幸福であつた、而して病院の火災も甚しきに至らず消止めた、早矢仕は此時、見舞の客に語つた、『米國人の義俠、博愛、慈善に富み居ることは、書籍で讀んだが、今や實際自分の身に依て明白となつた、余を救助したる米國人は余の傷口の血を浴びつゝ應急の手當をなして呉れた』云々、渠れは明治七八年頃から熱心に日米同盟を唱へた、太平洋は日本と米國が支配すべし杯と論じた、時人は奇矯の言としたが、實に今日の時勢を見拔